S.I.C.　-the System of Isolation for C.

相羽わをん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ．Ｉ．Ｃ．　－ｔｈｅ　Ｓｙｓｔｅｍ　ｏｆ　Ｉｓｏｌａｔｉｏｎ　ｆｏｒ　Ｃ．

【Ｎコード】
Ｎ４４９２Ｘ

【作者名】
相羽わをん

【あらすじ】
建国の王カルロスＩ世が没してから数百年後、記憶喪失の少女と、玉座を目指した少年が出会うとき……世界の歴史はヒずミだす……！国宝級魔法使いと宮廷医師団員の兄弟、そして我欲（？）の強すぎる女性執事などと関わりながら、２人が目指すのは？？。

中世ヨーロッパ風異世界を舞台に、少女リアを追った話題作！　に、なる予定！

あの夜

ある半月の夜。
暗い部屋の中で、暖炉の火だけがごうごうと燃えている。少女は暖炉の前に立っていた。お忍びで城下へ出かけた時の町娘の服を着て、手には病床の祖父に宛てた手紙。斜めがけにした袋には、食料と水、宝石箱。
王の孫娘というだけで手にする事ができた、貴重な書物や、自分好みの服、職人が丹誠込めて作った靴、絵画…ああ、全てを置いて逃げる時が来たのだ。
少女は息を吐いた。
少し惜しい気はした。しかし、それは生きて喜びを感じられるならこそ、惜しむべき。命の糧を得る時に売ればいい…そう思って装飾性のない宝石ばかりを集めていれた。
ただ、祖父が少女のためにあつらえたティアラだけは、売るためでなく、形見として持って行くつもりであった。ティアラの正面の宝石は、父と母の形見。母は幼い頃亡くなり、祖父の親友であった父は行方知れずだという。
「おじい様」
少女は手紙を見つめた。
祖父に直に渡したくて、部屋を尋ねたが、いつも大叔父の差し向けた衛兵に阻まれて渡せずじまいだった。
これは不正の証拠。
不正どころではない。大犯罪の証拠。
防がなくては。
多くの人々のために。
私たちは、命をかける。
生きるにせよ、死ぬにせよ。
「俺だ、入るぞ」

焦茶のマントを羽織った、それでも分かる程に筋骨たくましい青年が入ってきた。
「メル兄様」
「もう時間がない、荷物はまとめたか」
「もちろん」
「すぐに出るぞ、行き先はヘリムの砦だ」
青年は暖炉の隣の隠し扉を開けた。厩近くの倉庫へ繋がっている。
「俺が先に行く」
青年は扉の奥へ入っていた。
「ちゃんとついて行くわ」
少女は返事をしたが、手の中の手紙を強く握り、暖炉へ投げ入れた。そして、隠し扉をくぐり、扉を閉めた。
部屋の中は、ごうごうという音ばかりが聞こえる。
炎の中の手紙は、ちりちりと音を立てたが、一向に燃えない。燃えないどころか、すべるように暖炉を飛び出し、花瓶を倒して水と花をぶちまけた。あえてびしょびしょに濡れながら手紙は本棚へ向かい、ぴたりと静止した。
本棚から1冊の分厚い本がふわりと空中に飛び出し、ぱらぱらとページがめくられ、手紙はページとページの隙間に滑り込んだ。本は再び本棚へ戻り、何事もなかったかのように暖炉の炎は燃え続けた。
病床の王と対立する王弟にして、彼女の大叔父たるジュベール公の怒号と罵声が城に響き渡ったのは、暖炉の火が消えた後の事であった。

記憶喪失少女リア

リアは街の噴水に腰掛け、辺りをきょろきょろしていた。街は噴水を中心に作られていて、周りの建物は真っ白なしっくいで作られている。沢山の宿屋、レストラン、喫茶店、布屋に服屋、装飾品やお菓子の露店。カラフルな屋根に、旗や置物や花が飾られて、目にも楽しい。人々も多くが笑顔で、街は活気がある。

街に住んでいるらしい少女が、リアを一瞥して、恋人らしい青年のところへ掛けて行った。少女の低めのヒールが石畳にぶつかって軽やかな音を立て、かわいらしいリボンで結われたポニーテールが揺れる。

街ってにぎやかだ、とリアは思った。

リアもまた、相方を待っていた。恋人ではないけれど。

「お待たせ！　結構高く買ってもらえたよ」

手を振りながら、人の良い笑顔で駆けてくる青年。村長の孫のハリスだ。村長そっくりの縮れた黒髪に、茶色の目。村のおばさん方に大人気。優しくて力持ち、ただしちょっと頭が悪い。

「問屋のおやじが、くれたんだ」

「ありがとう」

手渡されたのは三角形の揚げ菓子だ。

「一休みしたら薬屋に行こう。そのあと荷馬車を引き取って、村へ帰ろう」

「うん」

私はハリスが問屋に行っている間、ずっと休んでいたんだけど……一人で薬屋に行くのは、ちょっと怖いし。リアはそう思い、揚げ菓子をかじった。カリカリふわふわした皮の中から、蜂蜜とチーズのクリームがとろりと出てきた。ハーブの香りもする。

「うん、おいしい。あ、リアの方はチーズだ」

「ハリスのは違うの？」

「俺のは芋と魚。いる？」
「ううん、いいよ」
街って贅沢だなぁと思いながら食べていると、目の前の役所から人がわらわらと出てきた。ロープを張って、なんだか物々しい。
「君たち、危ないからあっちへ行っていなさい」
はげ頭でちょびひげのおっさんが、茶色いニットベストを着て、汗を拭きながらリア達の方へ走ってきた。
「分かりました。行こう、リア」
「うん」
２人で花屋の前まで移ると、役所の人が警笛を拭き始めた。白と赤の旗も振ってる。ごうん、ごうん、という音がして、空から、ゆっくりと何かが降りてきた。
「すごい、飛行艇だ。俺、初めて見た」
ハリスが揚げ菓子の入っていた袋をぐしゃぐしゃといじった。
「きっと貴族身分の人だ。なんだろう、視察かな」
リアはハリスの言葉がほとんど聞こえていなかった。降りてきた人と、目が合ってしまったからだ。
光を吸い込んでいるようなその人。金の髪、青い…ちがう、紫色？
この色を、雰囲気を、知っている気がする。
「マグニフィセント」
リアは知らぬうちに呟いていた。
その人は驚いたような表情をして、役人に何事か告げると、ふっと微笑んだ。

役所の応接室で、その人はくつろいでいた。
茶色のベストのおっさんに「くれぐれも失礼のないように」と言われ、すっかり緊張したハリスとリアは、椅子に慎重に腰掛けた。
「どうも、はじめまして。僕はアリー。君は？」
ソファに寝転んだまま、その人は言った。ハリスは息を勢いよく吸って、むせた。

「すみません、失礼しました。ハリスと、リアです」
「はじめまして」
リアがお辞儀すると、アリーは起き上がった。
「ここのソファは固くて、お昼寝向きじゃないね。さて、君、自己紹介して」
「は、はい！　自分はここから更に東にあるココ村出身で、この街へは村でとれた野菜とか果物とかの加工品を売りにきました。明日の朝街を発つ予定です。えっと、自分は村長の孫で、村の商品を売りにくる役です」
「ふーん、リアちゃんは？」
「リアは、半年くらい前から村に住んでます」
リアの代わりにハリスが喋った。
「春祭の最中に、空から池に落ちてきたんです。本当です。出身地も家族もほとんど覚えていないので、子どものいない、鳥だけが家族みたいなばあさんの家で一緒に暮らしてるんです」
「そっかー。大変だったね、リアちゃん」
「村の皆さんが優しいのでそれほどでは」
リアは素直に言った。
「リアちゃん、覚えている人の名前、教えてもらってもいいかな？」
リアは息を吸って、天井を見た。
「名前は覚えてないんですが、両親は亡くなって、祖父と暮してて、兄が3人いたと思います」
「あの、アリー様は、貴族身分ですか」
ハリスが身を乗り出した。
「そうだよ？」
興味なさそうにアリーが返事をしたが、ハリスは続けた。
「実は、リアが落ちてきた時に下げていた鞄に、宝石箱が入っていたんです。その中に、沢山の宝石と、お姫様がつけるような髪飾りが入っていて……」
「それは村にあるの？」

「それが……村に泊まった旅人が持ち去ってしまったんです」
「あーそう。残念だなぁ。でもまあいいや」
アリーは立ち上がった。
「パリス」
「ハリスです」
「失礼。ハリス、僕の弟がイストベルクで医者をしているんだ。記憶喪失の患者も引き受けているから、リアちゃんに弟の治療を受けてみてほしい。弟は魔法医なんだ。どうかな、リアちゃん？」
笑顔で、リアを振り向くアリー。
「治療費を払えるだけの財を、持っていません。村の方にも迷惑はかけたくないんです」
リアは深刻に思った。魔法医なんて、とんでもなく高額な治療費を請求してきそう。
「大丈夫、僕が持つから。困った人を助けるのも、貴族の使命なんだよ」
「……」
「じゃあ、お手伝いをして、それで払うって言うのは？　イストベルクは知ってるよね？　大都市だから、賃金も高い」
「すごい！　リア、行ってきなよ。きっと、家族も心配してる。記憶を取り戻して、会いに行ったほうがいい」
ハリスはリアの手を握って、目を見て言った。家族４世代が暮らす家に育ったハリスは、家族の温かさはかけがえのないものだと思っていた。
リアははっきりと感じた。温かく優しいハリスなら、きっと、子どものいない、あのおばあさんの面倒も見てくれる。村の人たちも、皆いい人だし。
「……じゃあ、おばあさんのこと、お願いします」
「おう、まかせてくれよ」
リアはハリスの手を握り返した。
「じゃあ、そう言う訳で僕とリアちゃんはイストベルクに行きます。

ここの裁判については後任者をよこすねー。じゃ、パリス」
「ハリスです」
「あーもー僕だめだね。あははー。で、ハリス、君のことは村まで僕の飛行艇で送るよ。ついでに、村へ僕のうちから農耕馬と農機具を少し、あと、若手を何人か派遣するよ。君の村の農産品は人気があるけど、若い人足りないみたいだし。できれば、僕のうちに、君のところで作ってる果物が届くようにしたいからさー」
アリーは早口で一方的に言うと、立ち上がってハリスに握手を求めた。
「あ、ありがとうございます」
「じゃあ、早速出発しよう！」

そして、リアは初めての飛行艇で初めての乗り物酔いに苦しむのだった。

執事アドラー

広い部屋は白を基調に、ピンクと緑とオレンジで彩られていた。大きなベッドは天蓋付で、ガラスの扉がついた本棚や、ティーセットの飾られたキャビネット、白い机と椅子には金細工。バスルームは全面鏡張りで、バスタブは猫足だった。

くぅ…

昨日の夜に見せられたのを思い出しているうちに、リアのお腹が情けない音を立てた。もうこれ以上は鳴けない、というように。

リアは目を開けて、いつもの部屋でない事を改めて実感した。今までの数倍やわらかいベッドの上で布団にくるまっていたかったけれど、さすがに、起きなければ。

顔を洗って、クローゼットの中から適当なものを見つけて着てみた。

モスグリーンのベーシックなワンピース。

まあまあかな。

鏡の前で思った時、コンコン、と扉がノックされた。

「失礼致します。おはようございます。アドラーでございます」

入ってきた執事は、リアを見て息をのみ、天井を仰いで眼鏡……

いや、目頭を押さえた。

「完ッ璧！！」

どうやら、リアはアドラーの予想を裏切る服を選択し、かつ予想以上にアドラー好みの少女に見えたらしい。

「わたくしはリア様ならこちらのようなお召し物と思っておりましたが」

アドラーが手で示したのは装飾の多いごてっとした古めかしいドレス。

「ああ素晴らしい、何て素晴らしい少女を連れてきてくださったん

でしょう！　奇跡！」
　アドラーは長い栗色の髪を振り乱し、自分が推薦するドレスを抱きしめて悶えている。長身で美人、メリハリのある体型のうえ、燕尾服も美しく着こなしているのに。
「あの、朝ご飯は……」
　遠慮がちに尋ねると、アドラーは眼鏡を直しながら答えた。
「ただ今ご案内します。朝食は大食堂で食べることになっておりますから」
　アドラーは重々しい扉を片手で開けた。
「本日のメインはオムレットですよ」
　卵料理は、村ではごちそうだった。
「楽しみです」
　リアが言うと、アドラーは嬉しそうに微笑んだ。
　ふわふわの絨毯を踏み踏み廊下を歩む。壁紙も繊細な花のパターン、天井まで絵が描かれ、所々に大きな花瓶に花が飾られている。大きな窓からレースのカーテン越しに朝日が差し込み、飾られた絵画がぼんやりと見える。これは泉の妖精と花の妖精の対話が描かれている。さっきのはユニコーン。
　素敵な絵が沢山ある、とリアは思った。
　廊下を右へ右へと行くと、大きな扉に突き当たった。ガラス張りで、レースのカーテンがかかっている。
「失礼致します。リア様をお連れしました」
　アドラーが言うと、中からどうぞという声が聞こえた。内側から扉が開いた。
　中は天井が高く、様々な植物が根を張っていた。植木鉢ではなく、地面から。大きく長いテーブルと椅子を置くスペースだけは、モザイクタイルが敷かれていた。
「おはようございます」
　リアが挨拶すると、テーブルについていた2人が立ち上がった。
　メインの席にいるのは30歳くらいの男の人で、金の髪に緑の瞳

だった。　７歳くらいの少年がどこかで見覚えのある、金髪と青い瞳。
「おはよう、リアちゃん」と少年。
「アリーから聞いてるよ。自己紹介するね。ぼくはアリスティド。アリスって呼んでいいからね！」
　にっこりと笑う少年は、天使みたいに可愛らしかった。水色のブラウスに、白いタイ、キュロット風のパンツは紺地に金のストライプ。
「こっちはクロード」
　緑の目を伏せながら、軽く会釈した。長身で、面長、　ぴしっと分けられた前髪、物静かな雰囲気。アリスティドと少し似ている気がする。白いシャツに黒いパンツ、装飾も何もなくシンプルだ。
「この屋敷はクロードの病院の一部なんだ。後で診察してもらってね！」
「よろしくおねがいします」
「じゃ、朝ご飯食べちゃおう」
　二人が座ったので、リアも慌てて席に着いた。
「いつも朝食は軽めなんだ。今日はスープと」
「ニンジンとカブのコンソメ仕立て、フラワーサラダ、マロンのドレッシング、シャンピニオンオムレット、パプリカクリーム、ベゲットパン、スウィートパンプキンです」
　アドラーが銀のトレーでリアの分を運んできた。ニンジンとカブのスープだ。
「美味しそう」
　リアは手を合わせた。
「いただきます」
　アリスティドとクロードは顔を見合わせ、笑顔で、リアと同じように手を合わせた。
「「いただきます」」
　朝食は、リアのいた村の話でおおいに盛り上がった。

診察室はアイボリーで統一されていた。季節の花が沢山飾られている。部屋の中央、一段高くなったところに、クッションがいくつか置かれている。その台自体も柔らかいようだ。
「あれが椅子だ。座って待っててくれ」
クロードは白衣を着ると、板に紙を置き、クリップで固定した。鉛筆でさらさらと何か書いている。リアの方はほとんど見ない。
無愛想な人だ、とリアは思った。リアが座ると、クロードはその隣に、少し間をあけて座った。
「名前と年齢、好きな食べ物を教えてくれ」
「ファミリーネームは覚えてません。名前はリア。多分１６歳。好きな食べ物は栗のコンフィチュール」
「どうしてそれが好きなんだ？」
「甘くて、美味しいから。一緒に住んでいたおばあさんが、名人なんです」
「今度この屋敷にも届けてもらうようにしよう。楽しみだ」
クロードは少しだけ、笑顔になった。ほんの、少しだけ。
「それでは、これから検査を始める」
少し緩んだリアの気持ちが、また一気に緊張した。

「アドラー」
「なんですか」
食堂で、のんびり食後のお茶を飲んでいるアリスティド。そしてクロスを外したテーブルを拭いているアドラー。
「リアちゃん可愛いでしょ？」
「ええ。本当に可愛い。可愛すぎてもう、動悸が止まりませんよ」
「リアちゃんの今朝の服アドラーの趣味じゃないよね？　アドラーなら重たーい生地にフリルたくさんのドレスとか、白いワンピース着せそうだもん」
「本当は着せたかったですよ！　でもわたくしが行く前に着終わっ

ていらしたので……」
「ぼくなら巷で話題のアニマルファッションをさせたいなー蛇とか！」
「リア様は何でも似合いますけど、遊びが過ぎると大変ですよ、特にフォローが」
「そうだねー」
「リア様は大事になさってください。今まであなたが見つける事ができなかった珍品ですよ」
「物みたいに言うなよアドラー。君じゃないんだから」
アリスティドは自分のティーカップに自分でお茶を足した。お茶の滴がはねて、テーブルが汚れた。
「わたくしだって大事にしてください。わたくしは弱く儚いのですよ。瞳は宝石、髪は絹、肌は白磁。ぶたれたら終わりです」
「そんで、君の機嫌を損ねた人は末代まで呪われるんでしょ？」
「末代までですめば、幸運ですよ」
アドラーははねたお茶を拭き取りながら、形のよいの唇で微笑んだ。

執事アドラー（後書き）

好きなキャラクターです、アドラー女史（準レギュラー）。レギュラーメンバーを差し置いて、堂々と第2話目のタイトルを奪取しました。

あに？

正午、食堂に現れたリアは、カチューシャを着けていた。目立たない黒いカチューシャだ。
「あっ、カチューシャ」
既に席に座っていたアリスティドが目を輝かせた。リアは頭を気にしながら恥ずかしそうに座った。
「アリス君、目がいいんだね。頭の中の活動を調べる装置らしいの」
このカチューシャはさっきクロードに装着された装置だ。なんでも、頭の中がどういう時にどういう働き方をするか記録できるらしい。
リアにはどういう物だかさっぱり分からないけど。
「あーだから黒なんだ。ぼくは赤とかピンクとかオレンジとかがいいと思うなー」
「女の子っぽいのは、あまり得意じゃなくて」
どちらかというと、スカートよりもパンツが好きなんです……とリアは言いたかった。
「そっかーじゃあ、刺繍は？　金糸で刺繍してあるのとか。医療用でもせっかくだからさー」
クロードが朝と同じ格好で入ってきた。黒いパンツに白いシャツ。
「兄さん、勝手にいじらないでくださいよ」
「えーいいじゃーん少し位」
「…おにいさん？」
クロードが、がたんと椅子に座った。
「そう言えば今朝、年齢は言ってなかったな……」
「そうだっけねぇ？」
アリスティドが両手でほおづえをついて、リアを見た。
「もう一度、自己紹介しまっす！　はい、クロードから」
「クロード＝レム＝ヴィズィオネル。今年で多分２６歳」

え、えええ！！
嘘だ３０代でしょう！！！！
「ぼくはアリスティド＝リュー＝ヴィズィオネル。好きな物はお菓子と紅茶と蜂蜜！　今年で多分３０歳でーす」
こらこらこらこら、嘘はよくない！
「え、その、冗談……」
「それがね、冗談じゃないんですよ」
グラスに水を注ぎながらアドラーがため息をついた。
「この性悪な館の主は人を騙くらかしてからかうのが大好きなんですけど、これだけは本当なんですよ。もうそろそろオトナになってほしいんですが、本人がお子様の格好が大好きで大好きで、ちょっと趣味が危ないかなって言うところもあるんですけど、まあ館の主ですから誰も文句も言えず……」
「世を忍ぶ仮の姿なの！　これは！」
７歳児がばんばんとテーブルを叩く。頬が赤くて可愛い。
「お嫁さんもらわないで悠々自適な独身貴族を貫かんとしているのに、まーイロゴトに頭がイッちゃってるおっさんたちが、はた迷惑な縁談ばーっかり持ってくるんだよ！　それが鬱陶しいからこういう感じで過ごしてるの！　このぼくの苦悩がわからないかな！？　ぼくは健全！　健康な男子です！」
アリスティドは言い切って、豪華な彫刻の柔らかい椅子にふんぞり返った。
そんなこと、こんなに可愛らしい男の子に言ってほしくない…。
リアはちょっと切なく思った。外見が可愛くても、中身が伴わないと残念な印象を人に与えてしまうものなのね……。
「自分は何もしていないが、兄さんが子どもに見えるのは、魔法で姿を若くしているせいなんだ」
クロードが水を一口飲んで言った。
「自分も、兄さんも、この国では高位の魔法使いだ。政治的な地位がそれなりにあって、魔力も相当強い。特に兄さんは、この国で一

番魔力が強い」
「そうそう」
アリスティドが頷く。
「兄さんの目の色は独特な色をしているだろう？　マグニフィセントという血筋の証拠で、この色はマグニフィセントブルーとも呼ばれる。これは男にのみ継承されると言われている」
「マグニフィセントって、聞いた事だけありましたけど……」
「そうか、一般人には国宝級魔法使いという呼び方の方が馴染んでいるから、リアは魔法に縁のある家の育ちなんだな」
クロードはどこからか取り出した手帳に、ペンでさらさらと書き付けていた。

昼食を食べ終わった頃、アドラーが思い出したように言った。
「そう言えば、昼食中にリア様の荷物が届きましたので、リア様のお部屋に運んでおきました。なんでも、同居なさってた方が急に亡くなって、その方の遺品も一緒に入っているとか」
「えっ」
おばあさんが、亡くなった！？
「葬儀は今日の昼過ぎからですので間に合いませんが、一応お悔やみの手紙は定型通りお渡ししておきましたよ」
「あ…ありがとうございます」
「重ねてお手紙を出すようでしたら、わたくしが手続き致しますので」
アドラーが優しく微笑んだ。
「ありがとうございます」
リアは、アドラーの心遣いに心底感謝した。そして、昼食後の時間は届いた荷物の整理にあてる事に決めた。
挨拶をして食堂を出ると、植物のある清々しさや甘い香りは一切しなくなった。かわりに、しんと静まり返った屋敷の広さが、廊下の向こうから迫ってくるようだった。

記憶を辿って、部屋へ向かう。朝は右へ右へと来た。だから、今度は左へ左へまがって行けばいい。リアはドキドキしながら、柔らかな絨毯の上を歩き始めた。

ここだ、と思って開けた扉の先は、荒れ果てた部屋だった。閉め切られたカーテンは裂け、壁の絵は落ち、椅子は放り出されて足が折れ、机はひっくり返り、花瓶は割れ、花は干涸び、酸っぱくて臭い、妙な臭いが充満していたので、リアはすぐに扉を閉めた。

ところが、部屋の中から聞いた事のある声が聞こえた。

「リーアッ！」

リアを呼ぶ声。村でおばあさんが飼っていた鳥と同じ声。

「ピピ？」

「リーアッ！　ダーシーテッ！」

リアは再び扉を開けて、異臭の中を突き進み、カーテンを開けた。細かい埃が立ち昇り、光をわずかに遮る。

ベッド脇に落ちているいびつな形の鳥かごの中に、見知った白い鳥がいた。尾は長く、くちばしは黄色く、目は黒、目元に薄紅色、黒い脚に、エメラルドグリーンの爪。おばあさんは何て言う鳥なのか分からないのよねぇ、と言っていた。

白い鳥は歪んだかごの中を飛び移りながら、ハヤクハヤクと急かした。　しかし、どうしてか、かごにの出入り口が開かない。仕方ないのでそのまま持ち出すことにした。

「ピピ、どうしてここにいるの」

「リア、ダーイスキ！」

「ねえ」

「ツカマッタ！」

ピピはカッカッと鳴いて、リアの後ろを見つめた。振り返ると、黒い何かが後ろに立っていた。

あに？　（後書き）

アリスなのに男の子。まあよくあることです。

おとうと。

黒いマント、黒いローブ、ぼさぼさと伸びた黒い髪、黒い瞳、目の下の隈、不満そうなへの字の口、そしてツンとする臭い。部屋があまり明るくないので男とも女とも分からないが、身長はアドラーと同じくらいだろう。

リアは鳥かごを抱えて立ち上がった。

「この鳥、私の恩人の鳥なの。鳴き声が聞こえたから勝手に入ってしまったんだけど、すぐに出るから」

リアはその人物の横をすり抜けようとした。しかし、その人物は鳥かごをがしっと掴んで通さなかった。

「この鳥は魔鳥だ」

男の声だった。

「魔鳥は素人が愛玩動物として飼うわけにはいかない凶暴な生き物だ。それに、この魔鳥を使う事で、世界が救われる。ここに置いて行け」

「この子はもともと農村のおばあさんが飼ってたの。全然凶暴じゃないし、むしろ賢いくらいよ。変な冗談はやめて」

「洗脳されているな……」

「あなたこそ洗脳されてるんじゃない？」

「俺はなんともない！」

怒鳴られた。リアはむっとした。

「手を放せ」

「いやよ」

「放せ！」

「嫌！」

男の目の色が変わった気がした。リアは男を睨みつけたまま、思いっきり、男の足をかかとで踏みつけた。

「っ！？」

リアはかごを奪い取って走り出した。廊下へ出ると空気がはっきりと違う。ああ臭かった。
「待て！」
振り返ると、男が追いかけてくる。やばいやばいやばい。そうだ、食堂へ行けばアドラーがいるはずだ。アドラーならなんとかしてくれるはず！

リアは曲がり角を右へ、右へ、右へと曲がった。
ヒールに高さのある靴でしかも柔らかい絨毯は走りにくく、鳥かごを抱えているためリアの足は普段より随分遅かった。服にあわなくても村から履いてきたブーツにすればよかったと後悔した。
ガラスの扉が見えた、と思ったとき。
ぐっと足が上がらなくなり、バランスを崩して、リアはうつ伏せに転んだ。顔をあげたとき、鳥かごがガラスの扉の手前に落ちたのが見えた。ピピが暴れている。起き上がろうとするとなんだか腰とお腹の辺りが重い。振り返ると黒いローブを着た金髪の男が、リアのスカートを握りしめていた。
「うっわぁ！　アドラー大変だよ！」
ガラスの扉の向こう、食堂からアリスティドが顔を出していた。
「リアちゃんがギルに襲われてる！」
「なんですって！　あのろくでなし！」
アドラーが鳥かごを蹴っ飛ばして走ってきた。男は荒い息をしていて、もう動けないといった表情をしていたが、一瞬後には白目をむいていた。
「わたくしの可愛いリア様にー！！」
と、言ってアドラーが男にバックチョークをかけていたのだ。男の喉を締め上げているアドラーの腕が意外と筋肉質だ。
「大丈夫？」
アリスティドがクッキーを食べながらリアを覗き込んでいた。
「うん、怪我はしてないから……」

リアが立ち上がると、アリスティドがリアの足下を見て、「ありゃ」と言った。
「走りやすい靴を用意しておくね」
リアは、そう言えばこの人は自分より年上だった、と思い出した。
「……あ、ありがとう」
男はほどなくしてぐったりしたので、アドラーが手際よく縄で縛り上げ、食堂に運んで植えてある巨木に縛り付けた。
「リア様もとんだ災難でしたわね」
「ほんとにさ！　この家に来て2日目でギルに会うなんて」
この縛り上げられた人物はギルというらしい。ギルは金髪が脂でべたべたと張り付いており、血色も悪い。
「さっき、黒目黒髪の男の人と会ったんですけど……このギルって人と同じような格好をした……」
アリスティドとアドラーが顔を見合わせた。2人で肩をすくめると、アリスティドはリアの手を引いて、さっきリアが昼食を食べた席に座らせた。アドラーが紅茶の入ったティーカップをさっとテーブルに置いた。テーブルにはクロスが掛けられていなかった。
「説明不足でごめんね、リアちゃん」
アリスティドは自分の席に座って紅茶を一口飲んだ。
「あれはギルバートって言って、ぼくらの一番下の弟なんだ。髪と目の色が気に入らないらしくて、魔法で黒目黒髪に一時的に変えてるみたい」
「魔法って、そんな事もできるの」
アリスティドは勿論、と言った。
「ぼくだって、見た目はリアちゃんより下でしょ？」
「あ、そっか」
「そう、同じ事。そんでね、魔法がとけると元に戻るんだよ。単純な魔法だと、怒ったり、泣いたり、気絶したりすると、魔法がとけちゃう。……あと、ギルの場合、あの部屋からでると魔法が無効になるんだ」

「へぇ……」
「今、ギルは魔力が封じられているから、その封じの魔法を弱める魔法を部屋に施してるんだと思う」
「へぇ……」
なんだか面倒くさい弟さんだなぁ、とリアは思った。
リアのこの半年の生活では、魔法というものが不必要だったからだ。村では、祭の時にともされる灯りが魔法で作られたものだったりするだけで、生活する上ではとんとお目にかからなかった。
「魔法って色々できるんだね」
リアが言うと、アリスティドはそうそう、と頷いた。
「万能じゃないけど、仕組みを理解すれば色々な応用が考えられるからね。便利だよー」
アリスティドは両手を広げると、右手に炎、左手に氷を作り出した。一瞬でだ。
「わっ」
「これは初歩。この二つを合わせるとね」
手の平を平行に構え、ゆっくり近づけると、鋭い破裂音がして、周りにもやができた。
「温度差で水蒸気を作るんだ。大概無害だし、目くらましとかによく使うね、僕は」
ぱたぱたとアドラーが銀のトレーで風を起こした。
アリスティドが座っていたところに、確か4日前に街で出会ったあの人が居た。
「アリス君……あれ？　アリーさん？」
「覚えててくれたんだ！　嬉しーなー！」
青年はにっこり笑って、細い指でティーカップを持ち上げた。
「えっと……魔法？」
「そ。そういうこと」
紅茶を一口飲んで、アリー、つまり青年姿のアリスティドは満足そうに頷いた。

おとうと。（後書き）

主人公は若干鈍感、まあ、よくあることです。アドラーさんが鳥かご蹴っ飛ばしちゃったのは、許して上げてください（´∀｀）バックチョークは彼女なりの愛情表現です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4492x/

S.I.C.　-the System of Isolation for C.

2011年10月28日10時10分発行